

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月24日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22320057

研究課題名（和文）ブレイクの複合芸術における「血」——医学的、ジェンダー的研究

研究課題名（英文）Medical and Sexual Approaches to Blood in Blake's Composite Art

研究代表者

今泉 容子（IMA-IZUMI, YOKO）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40151667

研究成果の概要（和文）：

本研究が対象としたのは、イギリス・ロマン主義期の詩人・画家・彫版画師ウィリアム・ブレイク（William Blake）の「彩飾詩」（Illuminated Poetry）とよばれる複合芸術の全作品であった。研究目的は、彼の作品に頻出する「血」の意味を、18世紀の医学的ディスコースに関連づけながら、また同時代のエロチカ文学（大衆文学）における「血」の描写と比較しながら、解明することであった。

本研究の独創的な点は、ブレイク作品に描かれた「血」の意味が「変化していくプロセス」を明らかにして、従来のブレイク研究ではすっぽりと抜け落ちていた「セクシュアルな血」の存在を明らかにするところにあった。

研究成果の概要（英文）：

This project was designed to examine the meaning of blood in William Blake's illuminated poems against the backdrop of the medical and sexual discourses which were prominent in 18th-century England. It was successful in clarifying what can be called "sexual blood" which had remained unexamined since the dawn of Blake studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	5,300,000	1,590,000	6,890,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ブレイク、複合芸術、血、医学、ジェンダー、18世紀、英国

1. 研究開始当初の背景

本研究の意義は、従来のブレイク研究ではすっぽりと抜け落ちていた「セクシュアルな血」の存在を明らかにするところにあつた。大胆で、独特で、複雑に交錯した「セクシュアルな血」は、ブレイクの表象体系の重要な柱のひとつになっているが、アードマンが解明した「社会的な血」の解釈が主流であったため、本格的に研究されることがなかった。その未開拓の領域に切り入るところに、本研究の独創性があつた。

ブレイクの作品は、視覚的に赤色がとびぬけて目立っている。彩色詩のイラストには、赤い炎がめらめらと燃えている場面や、肉体に赤い血管が浮き出ている場面が頻出する。イラストだけでなく詩文においても、赤のイメージが主流である。「炎」と「血」の赤色である。

完ぺきな形で残っているカラー版は、アメリカのイエール大学にある Center for British Art に保管されている。ちょうど全百枚で構成されている『ジェルサレム』の一枚一枚のプレートが、血の（ややかすれ気味の血の）褐色っぽい赤色を基調に刷られている。詩文の活字も、イラストのアウトラインも、ページの枠の罫線も、ページ番号の数字も、みな褐色がかつた血の色なのだ。『ジェルサレム』最後を飾る百葉には、ページいっぱいのイラストが描かれているが、そのイラストも全体が血の褐色。右のほうで布を広げる女がいるが、この布からは血がしたたっている。たえず喚起される赤。ブレイクにおける「炎」は、革命やオーク（この名前の登場人物自身、革命を意味する）が出てくるところには、かならず出現する。その「革命的な」意味は、いまではあえて考察するひとがいないくら

い、ブレイク作品のなかでは自明になっている。しかし、「血」については、炎とおなじくらい頻出するにもかかわらず、じゅうぶんな注意が払われることがなかった。“Fire”

（炎）を載せているデイモンの『ブレイク辞典』でも、“blood”（血）は載せていないのだ。ゆいいつの例外が、アードマンの「社会的な血」の研究であった。社会の犠牲者が流す血、という解釈は、初期のブレイクの作品に頻出する。しかし、後期のブレイク作品の「血」には、それとは異なる「セクシュアルな血」が出現していることは、アードマンをはじめ、従来のブレイク研究において考察されなかったのである。

本研究が着眼したブレイクの「セクシュアルな血」が、どれほど特異なものであったかを明らかにしようとする本研究は、同時代（18世紀）の医学と大衆文学（とくにエロチカ文学）において出現する「血」の意味を読解する作業を行って、ブレイクの「血」との差異を明らかにしようとした。

ブレイクと医学の結びつきは深く、ブレイクが Spurzheim の *Observations on Insanity* を所有し、欄外に書き込みを残したことや、出版者ジョゼフ・ジョンソン (Joseph Johnson) に雇われて、ジョン・ブラウン著『医学入門』 (*Elementa Medicae*) の英語訳本 (1788年) の口絵の彫版を行ったことだけに限定されはしない。多くのラディカルな書物の出版を手がけたジョンソン経由で、ブレイクは当時の医学の知識を聞きかじっていた。そうした医学の（とくに血液学の）ディスコースに見られる「血」とブレイクの血の関係と乖離を明らかにしようとしたのである。

18世紀エロチカ文学に関しても、医学書とおなじく、「血」の描写が出現するシーン

を考察対象とした。「血」の描写といえば、ゴシック小説を視野におくのは必然である。エロチックでなくとも、「血」が出る文学は存在する。大衆文学作品には、「血」の性差が明白に織り込まれている。たとえば、男の血は純潔の証しにならないが、女の血は処女の証しになる、という単純なジェンダー観もあれば、男の血は有限であり、喪失を防いで体内に保存されるべきであるが、女の血はいくらでも無限に流出できる液体である、という複雑なジェンダー観もある。これらの18世紀の「血」の文学のなかに、有意な男女差を検出し、ブレイク作品における「血」の男女差と比較考察していった。

2. 研究の目的

従来のブレイク研究が探究していた「社会的な血」ではなく、これまで着眼すらされていなかった「セクシュアルな血」をブレイク作品（とくに後期の作品）に検出し、その「血」の意味を解明することが、本研究の目的であった。そのため、ブレイクの複合芸術においてブレイクと医学、ブレイクとエロチカ文学が「血」を接点としてどのように「結びついているか」、また「乖離しているか」を明らかにしようとした。

具体的には、ブレイクの初期作品から後期作品へ移るにつれて「血」に込められた意味が「変化していく」ことを明示しようとしたのである。その「変化のプロセス」は、アードマンが主張した「社会的な血」から、本研究が重視する「セクシュアルな血」への変化と言えるものであった。

3. 研究の方法

本研究はジェンダーの視点をブレイク研究に導入する方法をとった。従来のブレイク研究が目指した「血」の研究は、アードマンの古典的研究書『ブレイク、帝国に反逆する予言者』によって本格的にはじめられた。その研究は、社会的反逆者としてのブレイクの側面を解明しようとしたため、「血」の「性差」は考慮されずに終わった。ブレイクの「血」の重要なアспектである「セクシュアルな血」が切り捨てられたのは、とうぜんの成り行きであった。この切り捨てられた「血」の考察を行うため、本研究はジェンダー論的視点にたった研究と位置づけることができる。

3年計画の本研究は、つぎの3段階を踏んで行われた。

1年目《ブレイク作品の分析》ブレイク複合芸術の初期から後期までの全作品において、「血」の出現シーンを検出し、「血」に織り込まれた「性差」を明らかにしようとした。なかでも「セクシュアルな血」に、分析の重点をおいた。

2～3年目《18世紀という環境に照らしたブレイクの「血」の解析》ブレイクの「血」に込められた意味を、18世紀の医学（とくに「血液学」）のディスコース、エロチカ文学（とくに「血」の描写）のディスコースに関連づけながら、解析しようとした。ブレイクの「血」が、当時のディスコースから何を吸収し、何を変容させながら、独自で特異な「血」を形成していったかを、明らかにした。

4. 研究成果

ブレイク複合芸術作品においては、初期から後期にいたるにつれ、男女の葛藤がしだいにクローズアップされていき、とくに後期の作品において「女の意志」(Female Will)とよばれる女たちが多数出現して、男を支配し、世界を支配するようになる。彼女たちが男との闘いに用いる武器が、「血」であることが、本研究によって解明された。また、「血」は男の武器ともなることも解明された。そうしたジェンダー的視点にたつて、ブレイクの複合芸術作品において頻出する「血」の大胆で、独特で、複雑に交錯した意味が、後期の作品になるにつれて大々的に描写されるプロセスが明らかになったと思う。

具体的に述べると、ブレイクの中期の『ユリズンの書』では人類最初の女が、男が流す「血」から形成されるようすが、「血の球体は震えた・・・とうとう女の形となって具現した」と描写されるにとどまっている(18葉が、後期になると状況が一変するのである。過渡期の未完作品『四ゾア』では、女は「血」を「乳」に変質させて、血=乳の液体のなかで「生き」るうちに、自分の「声をもつ」ようになり、その声を発して男に対抗していく(108頁)。やがて後期の作品『ジェルサレム』になると、血から誕生した女は「これは女の世界だ」、「わたしはぜったいあなたの奴隷にはならないから、覚えておきなさい」といった主張を、男に投げつけるようになる(87～88葉)。そして男の血を支配しようとするようになる。女の存在の源となった男の「血」は、「精液」に変質して、女にセックスを迫るときに出現するが、女はこの血=精液を自分の好きなように操作するのである。

こうして血は男女の闘いの場において、複層の意味を有するようになり、男の体から噴

出する血と女が保有する血が闘いあうのである。女と男は「血」を流し、「血」を操作することによって、相手との力関係を変容させていく。

こうした独特な「セクシュアルな血」は、ブレイクの表象体系の重要な柱のひとつになっているが、偉大な先駆者アードマンの「社会的な血」の研究が多大な影響力をもったため、これまで本格的に研究されてこなかった。その未開拓の領域に切り入って、ブレイクの「セクシュアルな血」を明らかにしようとしたことが、本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計1件) 共著

① Yoko IMA-IZUMI, "Blood in Blake's Poetry of Gender Struggle," Helen BRUDER and Tristanne CONNOLLY, eds., *Sexy Blake*, Palgrave Macmillan社刊行, 2013年末(予定), 契約提携済み, 査読有り

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今泉容子 (IMA-IZUMI, YOKO)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号: 40151667